

政治的社会化／社会化の政治化

むくお あさこ
 棕尾 麻子（慶應義塾大学大学院）

e-mail : mukuo@1999.jukuin.keio.ac.jp

近年、教育基本法の改正や「心のノート」の導入、歴史教科書論争などといった右傾化の動きもあり、政治と教育との関係が改めて問題化されている。また、価値の多元化・流動化にともない、これまでの社会化／教育の内容の自明性が疑われるようになって久しい。本報告は、こうした状況の下での社会化過程を理論的に再考する試みの端緒である。

政治と社会化との関係をめぐっては、政治的社会化論として、主に政治学の領域で論じられてきた（Dawson et al. 1977=1989、Greenstein 1965=1972 など）。政治的態度の形成に関するこれらの議論は、社会化される個人の能動性を意識はしながらも、社会や政治の正統化・安定化の要件として政治的社会化の過程をみる向きが強かった。また、そこで焦点となるのは、政党支持などといった、いわば大文字の政治に対する態度の伝達である。だが、言語論的転回などを経て、よりミクロなイデオロギー性や歴史性をも主題化される今日の学問的状況、またグローバリゼーションやハイ・モダンティといった社会的現状を鑑みると、政治的社会化論でいわれる「政治」では語りつくせないような政治性にも目を向ける必要があるだろう。

教育社会学の領域でも、かつては機能主義的／規範的なアプローチが主流を占めていたが、1960年代末以降、いわゆる「新しい教育社会学」の台頭によって転機を迎えることとなる。「新しい教育社会学」は、カラベルとハルゼーの編著『教育と社会変動』（1977=1980）などに代表されるものだが、以降、解釈的パラダイムが英米のみならず日本でも有力な研究視座となった。

本報告では、こうしたパラダイム転換およびそれ以後の社会化論を論じる際に見過ごされてきた点を指摘してみたい。それは、「新しい教育社会学」とカルチュラル・スタディーズ（以下CS）との関連である。

CSは、体系的な理論の制度化を避ける傾向があることから一概に説明しがたいが、日常生活でのさまざまな言説を、具体的な文脈において分析・解釈する実践だといえる。特定の歴史や社会状況によって構築されたものである「文化」の恣意性・政治性およびその権力関係を問うており、人種やジェンダー／セクシュアリティなどに関わる社会運動にも大きな影響を与えている。

教育はある種きわめて近代的な営為といえるものであり、その意味で、しばしば「ポストモダンの」と評され（揶揄され）るCSと、教育学・教育社会学とは相容れないと思われるきらいもあろう。しかし、両者は長い間、緊張をはらみつつも並走してきたといえる（「新しい教育社会学」が英国で議論された頃「ニューレフトレビュー」誌に関わっていたS. ホールをはじめ、CSの論者の多くが高校や成人教育講座での教歴を持つこともその証左のひとつである）。教育社会学とCSとのこうした関係は、研究成果の評価にもみてとれる。たとえば、P. ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』（1977）は、エスノグラフィーの技法によって、（ネオ）マルクス主義と再生産論との融合を果たし、教育社会学に多大な影響をもたらした。その一方、同著は労働者階級の若者サブカルチャー／カウンターカルチャー研究として、CSの古典とも目されている。

CS およびその流れを汲むアメリカの批判

教育学 critical pedagogy (Giroux 1992=1996) は、文化による差異化・序列化に着目する点で、文化的再生産論など、「新しい教育社会学」以降の議論と問題関心を共有しているにもかかわらず、現在の学問領域としては、別個のものとして発展してきたようにみうけられる。とりわけ日本においては、「新しい教育社会学」とCSとに通底する政治的関心や運動的側面が看過ひいては脱色されてきた感が否めない。もっとも、その理由のひとつには、CSが日本に紹介される際にマスコミュニケーション論の一形態として専ら注目され、そうした領域に押し込められてきたという事情がある(小笠原 1997)。

だが、従来の政治的社会化論のいう党派性に限定されない政治性、すなわち、ジェンダー、人種・民族・エスニシティ、階級等々を社会化論の俎上に載せることが可能となろう。また、社会化の多様なエージェンシーを考慮するうえでも、大衆文化 popular culture やメディアを対象とするCSの知見は注目に値するだろう。

今後の課題としては、「新しい教育社会学」「批判的教育学」を学校や家庭という場のみに閉じ込めるのではなく、社会化論として拡張していくことがあげられる。さらに、そのような文脈をもって、CSを日本における教育社会学の理論／実践に(再)導入させることが目指されよう。

教育自体を文化の政治学だとみる、CSの問題構制から、(政治的)社会化論の新たな地平を切り開けるのではないだろうか。

参考文献：

Dawson, Richard E., Kenneth Prewitt and Karen S.

Dawson, 1977[1969], *Political Socialization 2nd*

Edition, Little, Brown and Company. = 1989, 加藤

秀治郎・中村昭雄・青木英実・永山博之訳『政治的社会化——市民形成と政治教育』芦書房。

藤田英典, 1992, 「教育社会学におけるパラダイム

転換論——解釈学・葛藤論・学校化論・批判理論

を中心として」『教育学年報』1: 115-60.

Giroux, Henry, 1992, "Resisting Difference: Cultural Studies and the Discourse of Critical Pedagogy,"

Grossberg, Lawrence, Cary Nelson and Paula

Treichler eds., 1992, *Cultural Studies*, Routledge =

1996, 大田直子訳「抵抗する差異——カルチュラル・スタディーズと批判教育学のディスコース」『現代思想』24(7): 129-47.

Greenstein, Fred I., 1965, *Children and Politics*, Yale

University Press. = 1972, 松原治郎・高橋均訳『子どもと政治——その政治的社会化』福村出版。

稲垣恭子, 1990, 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性——教育的言説と権力の分析に向けて」『教育社会学研究』47: 66-75.

Karabel, Jerome and A. H. Halsey eds., 1977, *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press. =

1980, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典訳『教育と社会変動——教育社会学のパラダイム展開(上・下)』東京大学出版会。

志水宏吉, 1993, 「変化する現実、変化させる現実：英国『新しい教育社会学』のゆくえ」『教育社会学研究』53: 5-30.

小笠原博毅, 1997, 「文化と文化を研究することの政治学——ステュアート・ホールの問題設定」『思想』873: 41-66.

Turner, Greame, 1996, *British Cultural Studies: An Introduction* Second Edition, Routledge. = 1999, 溝上由紀・毛利嘉孝・鶴本花織・大熊高明・成実弘至・野村明宏・金智子訳『カルチュラル・スタディーズ入門——理論と英国での発展』作品社。

Willis, Paul E., 1977, *Learning Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Saxon House. = 1996[1985], 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への抵抗 労働への順応』筑摩書房。

吉見俊哉, 2000, 『思考のフロンティア カルチュラル・スタディーズ』岩波書店。